中等教育國語讀本 新材出編 巻九

4a
810
ｵ7

41710
教科書文庫
4
810
41-1918
20000
67120

資料室

4a 810 K7

文部省檢定濟

大正七年一月廿六日　中學校國語科用

文學博士新村出編

中等教育國語讀本

東京　開成館藏版

広島大学 教 67120 図書

卷九　目次

一　國體の精華　穗積八束　一
二　賀の歌　八
三　光賴參內（平治物語）　九
四　重盛諫言　その一（平家物語）　一八
五　同　その二（同）　二四
六　春十句　三三
七　大原の里　大町桂月　三四
八　大原御幸（平家物語）　四三
九　落花の雪（太平記）　五四

一〇　百蟲譜　横井也有　六〇
一一　心の國　武島羽衣　六六
一二　狂歌（國文學歴代選）　七一
一三　狂句（國文學歴代選）　七八
一四　夏十句　八三
一五　嶽上の奇　遅塚麗水　八四
一六　山の歌　八八
一七　自然に接せよ　高山樗牛　八九
一八　月　松平定信　九四
一九　妹にさとす　吉田松陰　九六
二〇　世界の四聖　高山樗牛　一〇八

二一　我果して我を觀得る乎　加藤咄堂　一一六
二二　日本海の海戰　土井晩翠　一二三
二三　大和民族の理想　德富蘇峯　一二七

中等教育

國語讀本　卷九

文學博士　新村出編

一　國體の精華

穗積八束

我が日本の國體と國民道德との基礎は祖先敎に淵源す。祖先敎とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族が其の同始祖を敬愛するに由りて共存團體を成し、祖先の威力に服從するに由りて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。

祖先崇拜の大義は血統團體を構成し維持する原由たると同時に、血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にするの成果あり。二者相須ちて消長し、須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に溯源し、血統團體を保維する軌轍たり。我が堅固なる國家の體制は祖先教の基礎に立ち、之を千古に建て之を萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり。

人は獨立孤存し得べき者にあらず、共同團結して以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持する者は、其の團結固からず、又久しからず。利害の異同は生活の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束はまた人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の始にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり。人爲を以て之を絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由りて離るべからざる共同生存を成すものは、血統團體なり。

血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の團結は永久なり。血族關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之を統一するものは祖先の威力

なり。祖先の威力は對等の約束にあらざるが故に、子孫の祖先に於けるや、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護するの權力なり。

吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したる餘惠なり。何が故に血統相近き者が相依りて家を成し、氏族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に吾人の生存を全うせんと欲するの天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛なる

保護の權力に從順なるの至情は、延いて之を其の父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は卽ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし。況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし。況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現在にある祖先たり、天皇は現世にある天祖たり。父母に孝なるべき所由は、卽ち皇室に忠なるべき所由にして、之を一貫する國教は祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持する軌道たるものなり。

人は信仰に因りて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現

象を總合して證明を其の根柢の眞理に求め、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は顯界に於て其の肉體を喪ふとも、尚幽界に在りて其の子孫を保護することを確信したり。是、祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所由なり。我が固有の國體民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長たり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲

するなり。祖先と吾人と子孫とが家國の觀念に於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うするの大義此に存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の親、悉く皆吾人の同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體は是に由りて其の基礎を立て、國民の道德は是に由りて深厚なり。斯國斯民を千古に溯り萬世に亙りて保持するものは、此の國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。

二　賀の歌

御民わき生ける志るしあまあえつちけ榮ゆる時にあへ
海犬養宿禰岡麿

らく思へば
やしごとにたひそふ竹のとゝををてかはらぬ色をたれ
紀　貫之

とかは見む
おもふこと今へなきかなでしこの花さくばかりなり
花山天皇

ぬとおをへば
君が代の久しかるべき為えしまや神もうるけむ住吉乃
讀人知らず

まつ
天地と限なかれと誓ひおきし神の御言ぞわが君のたえ

世中よみちゝそ
ふきれたをむいる
やはらなる
志の花ひくふ松

藤原定家筆　小倉色紙

天のはら
をざしまつれる
日の御神
照らさむかぎり
國はうごかじ
藤原定家
加藤千蔭

ひとつもて君をいはゝむ一つをて親を祝はむふゝもと
落合直文

三　光頼參内

十二月十九日　平治元年のこと。

内裏には、十二月十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衞門督光頼卿、このほどは信頼卿の擧動過分なりとて不參にておはしましけるが、參内して承らむとて、ことにあざやかに束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに帶き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に膚に腹卷著せ、雜色の裝束に出立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな、汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れとて、御身近く置き、その外、清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を固め守

束帯著用の圖

長方　藤原氏。

母方の舅　光頼は信頼の母の兄なり。

護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上臈達皆下にぞ著かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな、人はいかに振舞ふとも、あれは右衞門督、われは左衞門督なれば、下には著くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ餘りにしどけなう見え候へと色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿のためには母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になりて色を失は

衛府督　右衛門督のこと、信頼を指す。

れければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿、下重の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取り直し、氣色して、今日は衛府督が一座すと見えて候ふ、召に參ぜざらむ者をば死罪に行はるべしとやらむ承りて、參内する所なり、抑、何事の御諚ぞと問ひけれども、信頼卿物も宣はず。著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て、光頼卿つい立ちて、悪しう參りて候ひけりとて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな、さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざり

頼光、頼信　共に源満仲の子。

つるに、仕出したることよ、門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず、あはれ、この人を大將として合戰せばゝいかばかりかたのもしからむと申せば、傍なる者、むかし頼光、頼信とて、源氏の名將おはしましき、その頼光を打反して、光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかしといへば、また傍より、なぞ、その頼信を打反して、信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病におはしますといへば、壁に耳、天に口といふことあり、おそろし、おそろし、聞かじといひながら、皆忍笑に笑ひけり。

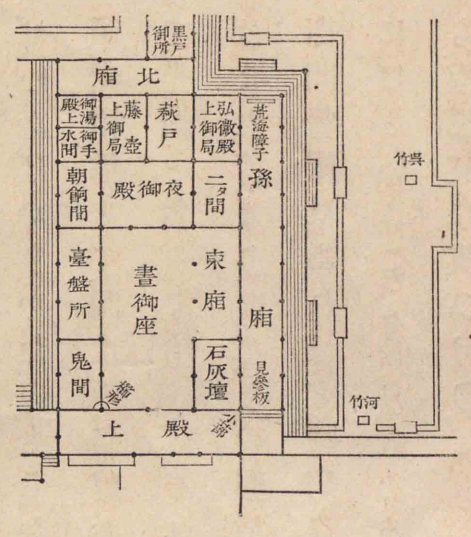
光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板、高らかに踏み鳴らして立たれたりけ

別當惟方 檢非違使別當藤原惟方。

少納言入道 藤原通憲。

神樂岡 今の京都市の西北郊外にあり。

るが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし、誠やらむ光賴も死罪に行はるべき人數にてあなる、傳へ承る如きはその人皆當時の有職、然るべき人共なり、その中に入らむこと甚だ面目なるべし、さても先日右衞門督が車の尻に乘りて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向かはれけることは如何、以ての外然るべからざ



清涼殿平面圖

勸修寺內大臣 藤原高藤。

三條右大臣 高藤の子定方。

英雄 攝家に次ぐ公卿の家格の名なる英雄家の略。清華ともいふ。

る擧動かな、近衞大將檢非違使別當は他に異なる重職なり、その職に居ながら人の車の尻に乘り給ふこと、先蹤もいまだ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり、就中首實驗は甚だ穩便ならずとのたまへば、別當、それは天氣にて候ひしかばとて、赤面せられけり。

光賴卿重ねて、こは如何に勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき、われらが曩祖勸修寺內大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代臣また十一代、承り行ふ事は皆これ德政なり、一度も惡事に從はず、當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人に

大貳清盛 平清盛。當時官太宰大貳なりき。

さしもどかるゝほどの事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし、大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉、紀伊、伊賀、伊勢の家人等待ち受けて、大勢にてぞあなる、信頼卿がかたらふ所の兵若干ならじ、平家の大勢押し寄せて攻めむには、時刻をや廻らすべき、もしまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき、灰燼の地となりたらむだにも朝家の御歎なるべし、如何にいはむや、君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし右衞門督は御邊に大小事を申し合はすとこそ聞ゆれ、相構へて相構へて、隙を窺ひ玉體恙なくおはし

主上 二條天皇。上皇 後白河上皇。

ますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ、黑戸の御所に、上皇は、一本御書所に、內侍所は、溫明殿に、劒璽は何處に、夜のおとゞに、と左衞門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衞門督住み候へば、その方ざまの女房などぞ影ろひ候ふらむと申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今はかくござんなれ、主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黑戸の御所に遷し參らせたなり末代なれどもさすが日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法を如何に守り給ひぬるぞ、異國にはかやうの例ありといへども、

許由　堯のおのれに位を譲らんとするを聞きて耳汚れたりとて潁水にてこれを洗へりといふ支那上古の人。

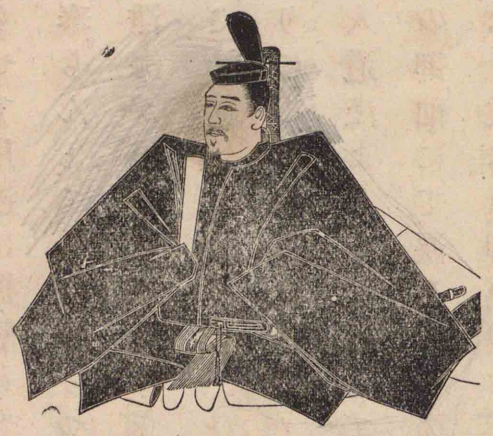
わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かなとて、のろ〳〵しけに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむとよにすさまじけに立たれたれども、光頼卿且は悲しくて、われ如何なる宿業によりてかゝる世にうまれ會ひ憂きことをのみ見聞くらむ、昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かむ輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れとて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼の座上に著せられし時はさしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。（平治物語）

四　重盛諫言　その一

内大臣　平重盛。

入道殿　平清盛入道淨海。

内大臣は弟の右大将宗盛卿より上に座たかく著座せられたり。檜扇中半に開きてつかはれけり。内大臣もしばしは物も宣はず、入道殿もまた音もし給はず。良久しくあつて、入道宣ひけるは、抑、此の間の事、西光法師にくはしく相尋ね候へば、成親父子が謀叛の企は事の始にて候ひけるぞ、大かた近來よりいとしもなき近習者どもが、折にふれ時に隨ひて、さま〳〵のことをすゝめ申すなる間、御かろ〳〵しき君にて渡らせ給へば、一定天下の煩、



平重盛

當家の大事、引出させ給ひぬと覺ゆる間、法皇を是へ迎へ參らせて、片邊に押籠め參らせんと存ずる間、此の事申合はせ奉らんとて、待ち奉りつるに、いかなる遲々にか候ふ。大方は淨海が思ひと思ふ事、御邊の御心に一々に違ひ候ふらん事こそ、遺恨に覺え候へと宣へば、内府畏り承り候ひぬとばかりにて、御眼よりはら〳〵と涙を落し給ふ。

入道淺ましとおぼして、こはいかにとのたまへば、内府直衣の御袖にて、涙をおしのごひて申されけるは、此の仰をかうぶり候ふに、御運のすでに末になり候ふと覺えて、不覺の涙のこぼれて、先なにかの子細は知り候はねども、此の御すがたを見參らせ候ふこそ少しもうつゝとも覺え候はねゝさす

が我が朝は邊鄙粟散の境と申しながら、天照大神の御子孫、國のあるじとして、天兒屋根命の御末、朝政を司どり給ひしより以來、太政大臣にのぼれる人、甲冑をよろふ事たやすかるべしとも覺えず、就中、出家の御身となり、かたぐ御憚あるべかりけるものを、三世諸佛の解脫幢相の法衣をぬぎすて、忽ちに甲冑を帶しましまさんこと、内には既に破戒無慚の罪を招き給ふのみにあらず、外にはまた仁義禮智信の法にも背き候ひぬらんとこそ覺え候へ。先重盛一々に御意に違ひ、ふしぎなる仰を蒙り候ふ上は、すでに不孝の仁に罷成候ふにこそ候ふなれ。さやうに候はんに於ては思ふことを心中に殘し候はんは、口惜しかるべう候へば、一々申開くべ

し。おそれながら暫く御心をしづめさせおはしまして、重盛が申狀を具に聞召さるべうや候ふらん。かつうは又最後の申狀にて候ふ。

たゞ今御院參の條何事にか。たとひ御院參あるべう候ふとも、重盛に仰合はせられ、申す所の一義をも聞召され候ふべかりけるものを、以ての外に物さわがしく覺え候ふものかな。謀叛の輩召置かれ候ひぬる上は、何とか君をば恨み參らせ給ふべき。まさしく君の叡慮より思召し立つ御事よも候はじ。近習の人々の申すゝめ參らせ候によつてこそ、御許容なども候ふらめ。たとひ又君の御結構にて、正しく院宣をもて仰せ下さるといふとも、しひて御ひが事とも覺え候はず。

新大納言藤原成親。

その故は上古を思ひやり候ふに、平將軍貞盛、將門を討ちたりしも、勸賞に預りし事受領には過ぎざりき。伊豫守頼義が十二年まで戰ひて、貞任、宗任を亡したりしも、いつか丞相の位に昇りて、父子ともに朝恩にあづかりし。しかるを此の一門は代々に朝敵をうち平げ、四海の逆浪をしづめたれば、隨分忠なりといへども、其の賞に預る事は、已に身に餘れり。先例傍例なし。君事の序をもて餘りの事なりと御氣色あらん事、全く以て御ひが事とも覺え候はず。謀叛の張本と仰せられて、新大納言召置かるゝ事、是また普通の義にあらず。我が君の御寵臣或は禁中伺候の人を、我が爲にあたをなせばとて、心のまゝに召置かれ、罪科に行はれん事然るべからずや。

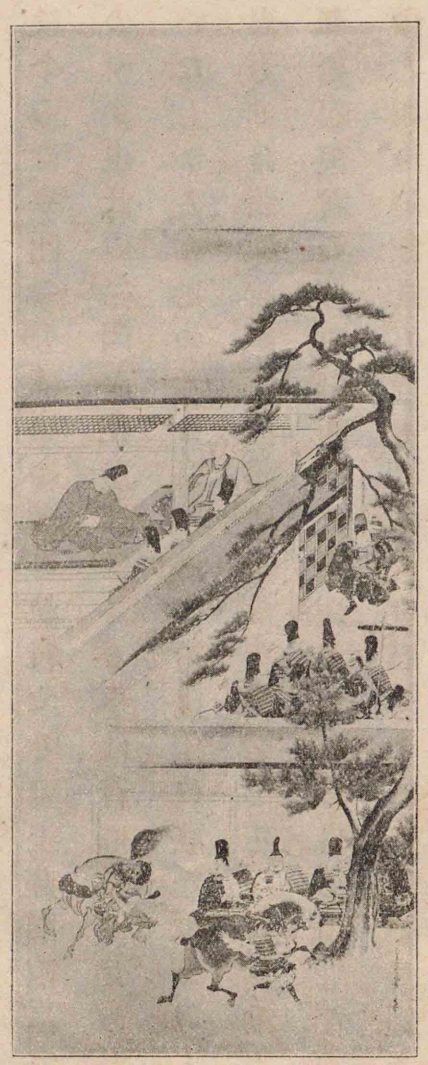
幾度も君に子細を奏して、御氣色にこそ任せらるべきに、押して召捕られぬるは、すでに君をなめ〳〵にしまゐらするにあらずや。此の上は今は御身を慎んで君の御ためにはいよいよ奉公の忠節を存じ、民のためには倍、撫育の御愛憐をいたしましまし、先非を悔いさせ給ひて、政務に私あらじと思召さば諸天善神の擁護淺からず、神明佛陀の御加護しきりにして、君の御政引かへて、逆臣忽ちに滅亡し、兇徒卽ち退散し、四海の狂亂しづかに、萬天の嵐やまんこと、掌を反さんよりも猶早々なるべし。

五　重盛諫言　その二

心地觀經　大乘本生心地觀經の略。唐の般若三藏の譯、八卷あり。

普天の下　普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。（詩經）

大方は諸經の說相同じからずして、內外存知各別なりといへども、姑く心地觀經第二卷によらば、世に四恩あり、一には天地の恩、二には國王の恩、三には師長父母の恩、四には衆生の恩是也。是を知るを以て人倫とし、知らざるを以て鬼畜とす。その中に殊に重きは朝恩也。普天の下王土にあらずと云



重盛諫言　岡田爲恭筆

ふことなく、率土の濱王臣にあらずと云ふことなし。就中國王の恩、此の一門極れり。日本は僅に六十六个國、然るを三十餘个國は、一門の分國にて政を執行す。その上莊園、田畠、家門の所領也。此の一門の朝恩にほこる事は昔も今もためしすくなし。かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を取りける賢人も、勅命の遁れがたき禮儀をば存ずとこそ承はれ。忝くも御先祖桓武天皇の御苗裔、葛原親王の御後胤と申しながら、中古より無下に官途も打くだり、わづかに下國の受領をだにもゆるされずして候ひけるに、故刑部卿殿備前の國務の時、鳥羽院の御朝、得長壽院造進の勸賞によつて、久しく絶えたりし内昇殿をゆるされ給ひし時も、萬民屠をぞ反しける

首陽山に 支那上古周代の人伯夷叔齊をいふ。

故刑部卿殿 清盛の父忠盛をいふ。

とこそ承れ。いかにいはんや、御身はすでに拜任の例を聞かざりし太政大臣の位きはめさせ給ひ、御末また大臣大將にいたれり。重盛などが短才愚暗の身をもて、蓮府槐門の位に至る。是希代の朝恩にあらずや。

今是等の朝恩を忘れて、君をかたぶけ參らせ給はんこと、天照大神、正八幡宮、日月星宿、堅牢地神に至るまで、御許や候ふべき。唯今天の責を蒙つて朝敵となり給ふべし。朝敵となるならば、近くは百日、遠くは三年を出でずとこそ申傳へたれ。君事のついでをもて奇怪なりと思召されんことは、尤もことわりにてこそ候へ。しかるを御運いまだ盡きざるによつて、此の事すでに顯れて、仰合はせらるゝ人々か樣に召置か

れぬ。たとひ又君いかなる事を思召し立たるといふとも、暫く何の恐かましますべき。大納言已下の輩に所當の罪科を行はれ候はん上は、退いて事の子細を陳じ申させ給ふべきにてこそ候へ。みだれがはしく法皇を傾け參らせられん事、然るべしとも覺え候はず。君と臣とを准ずるに、親疎をわけて君に附き奉るは忠臣の法也。道理と僻事とを竝べんに、いかでか道理につかざらんや。是は君の御道理にてこそ候へ。重盛に於ては御院參の御供仕るべしとも存じ候はず、叶はざらんまでも院中を守護し參らせんとこそ存じ候へ。その故は重盛始めて六位に敍せしより、今三公のするにつらなるまで、朝恩を蒙る事身に於ては頗る過分也。その重きを思

千顆萬顆の玉　螢日螢風・高低千顆萬顆之玉、染枝染涙、表裏一入再入之紅。（菅原文時）

新院　崇德上皇。一院とも申す。

左府　左大臣藤原頼長。

大將軍　爲義をいふ。

へば千顆萬顆の玉にも越え、其の深きことを論ずれば一入再入の紅にも過ぎたるらん。

然れば重盛君の御方へ參り候はば、侍二三萬騎はなどか候はざらん。その中に命にかはり身にも代らんと思ふ侍、二三百人はなどか候はざらんや。是等を引具して院の御方へ參りて、禦ぎ戰ひ候はば、以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。是を以て昔を案ずるに、保元逆亂の時、六條判官爲義は新院の御方に候ひ、子息下野守義朝は内裏に候うて、合戰事終つて大炊殿戰場の煙の底に成りし後は、一院讃岐の國へ御下向あり、左府は流れ矢に當りうせ給ひて後、大將軍法師になりて、子息義朝がもとへ降人になり、手を合はせて向か

朱雀大路　昔の京都大内裏正南の朱雀門の通り。

五逆　殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

迷廬　蘇迷廬の略。佛説にいふ須彌山の一名。高さ八萬四千由旬ありと説く。

君君たらず　君雖不君、臣不可以不臣。父雖不父、子不可以不子。（古文孝經序）

ひたりけれども、今度朝敵の大將軍なりとて、斷罪に定まりにければ、義朝力及ばず、人手に懸けんよりとて、朱雀大路に引出して、父がかうべを刎ね候ひしこと、勅諚と申しながら、惡逆無道の至、口惜しき事かなとこそ存じ候ひしか。今度君打勝たせましまし候はば、かの保元の例に任せて、重盛五逆のその一にやなり候はんずらんと存じ候ふこそ、豫て心うく候へ。かなしきかなや、君の御爲に忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂なほくだれる父の恩忽ちにわすれて、不孝の罪輕からず。痛ましきかなや、不孝の罪を遁れんとすれば、また君の御爲に不忠の逆臣となりぬべし。君君たらずといふとも、臣以て臣たらずばあるべからず、父父たらずといふとも、

老子の言葉　富貴而驕、自遺其咎、功成名遂身退天之道。（老子）

子以て子たらずばあるべからず。これといひ、かれといひ、無益のことにて候ふ。末代に生をうけてかゝるうきめを見る重盛が果報のほどこそ口惜しく候へ。

されば申うくるところ、猶御承引なくして、御院參有るべう候はば、先重盛がかうべを召さるべう候ふ。所詮院中をも守護すべからず、又御供をも仕るべからず、申受くるごとく、只首を召さるべき也。いざ思召し合はせまし〳〵候へ。御運一定するゑになりて候ふとおぼえ候ふ也。人の運のするゑにのぞむ時こそ、かゝる僻事を思ひ企つる事にて候ふなれ。功成名遂身退天之道と申す老子の言葉こそ思ひ合はせられ候へ。かの漢の蕭何は大功を立つる事傍輩に越えたるによつて、

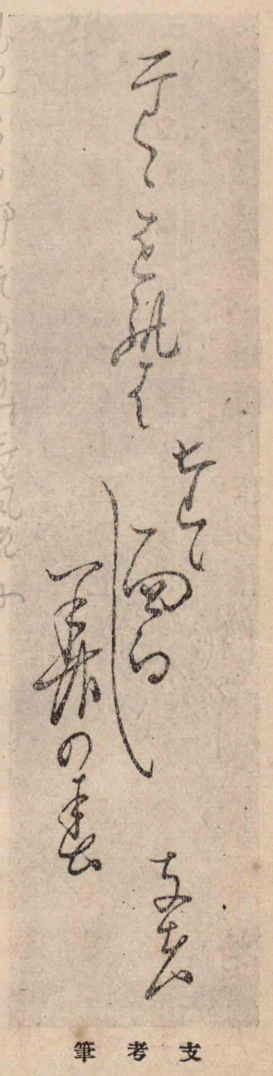
富貴の家
富貴之家祿位重疊、猶再實之木其根必傷（事文類聚）

官大相國に至り、劍を帶し沓をはきながら、殿上に昇ることを許されたりき。しかれども、叡慮に背くことありしかば、高祖重くいましめて、廷尉に下して深く罪せられき。論語と申すふみには、邦無道則富且貴恥也と云ふ文あり。かやうの先蹤を思ひ合はせ候ふにも、御富貴といひ、朝恩といひ、重職といひ、一方ならずきはめて、年久しくなりましませば、御運の盡きん事も難かるべきにあらず。富貴の家、祿位重疊せるは、猶再び實なる木の其の根傷む如しともいへり。心細くこそ覺え候へ。いつ迄命いきて亂れたる世を見候ふべき。只急ぎ急ぎかうべを刎ねられ候ふべし。侍一人に仰付けて、たゞ今御つぼに引出されて、かうべをはねられん事は、よにやすき

事にてこそ候はんずれ。是は殿原いかゞ聞き給ふとて、直衣の懷の中よりたゝう紙を取出して、はなうちかみうちかみ、さめ〴〵と泣き諫め申されければ、一門の人々よりはじめ、侍どもに至るまで、鎧の袖をぞぬらされける。（平家物語）

六　春十句

馬借りてかはる〴〵に霞みけり　蓼太
白梅や墨芳しき鴻臚館　蕪村
鶯や下駄の齒につく小田の土　凡兆
公達に狐化けたり宵の春　蕪村
たゞをればたゞ面白し花の春　支考



何事ぞ花見る人の長がたな　去來
まさごぢやかげろふを追ふ波がしら　几董
落花枝にかへると見れば胡蝶かな　守武
手をついて歌申しあぐる蛙かな　宗鑑
つばくろや三十三間堂のあめ　酒竹

支考筆

七　大原の里

大町桂月

都をば今日をかぎりの關水にまた逢ふさかの影やうつさむ　平宗盛

君住めばこゝもくもゐの月なれどなほ戀しきは都なりけり　平行盛

月を見しこぞの今宵の友のみや都にわれをおもひいづらむ　平忠度

わけてこし野邊の露とも消えずして思はぬさとの月を見るかな　平經正

はかなしなぬしは雲居にへだつれば宿はけぶりとたちのぼるかな　平教盛

ふるさとを燒野の原とかへりみて末も煙のなみぢをぞ

ゆく　平経盛

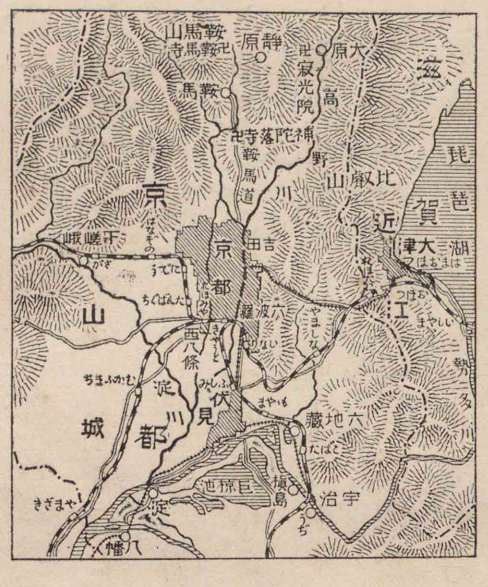
いづくとも知らぬあふ瀬のもしほ草書きおく跡をかたみとも見よ　平維盛

あふことも露の命ももろともに今宵ばかりやかぎりなるらむ　平重衡

歸りこむことはかた田にひく網の目にもたまらぬわが涙かな　平時忠

とりぐにぬはれかる歌のかずぐ、今に人をして腸を斷たしめむばかりなり。さても二十年の榮華を夢ふ見て、都を落ちゆきし平家の公達の心の中やいかなりけむ。

明治四十二年一月の初、われ京都に遊びて滯留すること十



燈籠大臣
平重盛をかくいふ。

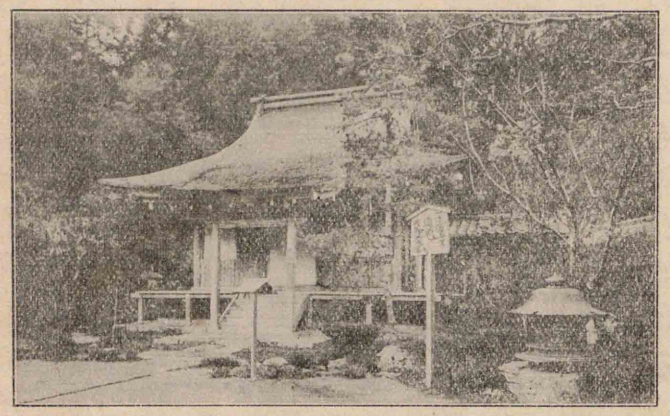
日に餘りぬ。大佛殿のあるあたりは當年、平氏が邸宅を構へし六波羅の地、その東の小松谷は燈籠大臣の住みし處、談合谷は成親、俊寛等が平氏討滅の密議を凝らしたる處、白川の流るゝあたりは、保元の世に修羅の巷となりし處とのみにて、平氏の痕跡今は求むべくもあらず。去つて鞍馬山に上る。これ義經が少年時代の覇氣を鎖したる處なり。毘沙門堂のあるあたりよりは、今の京都は見えず、當年も六波羅は見えざりしなるべけれど

も、清盛が別邸を構へたる西八條は見えしなるべし。これを見たる義經の心や如何なりけむ。平家の貴公子が玉樓に舞袖を飜しし時、誰か思はむや、鞍馬峯上、劍氣夜凝らむとは。義經の住みし坊、今は跡形も無し。魔王の堂畔、連なりかさなれる石の龜裂したるは、義經の刀痕とかや。峯上に一株の老杉あり。千年以外のもの也。當年の興廢を問へども、木は默々たり。唯天風來りて梢をうごかすのみ。一絶を作つて曰く、

夢裡榮華耽佚遊。一門公子悉風流。
誰知鞍馬峯頭寺。夜々劍光衝斗牛。

この夜鞍馬山下の旅店に宿し、翌朝奴峠を越え、靜原村を經て、大原村にいたる。四方に山を負ひて、田開け、茅屋點綴せる

別天地なり。高野川の清流その中央を貫く。南に高きは比叡の四明峯、北に最も大なる比良山は雪を帶びたり。四明の餘脈透迤として北に連なり、樹木茂りて大原の東方を護る。そこに音無の瀧白玉を躍らし、流の末、別れて律川となり、呂川となりて、高野川に入る。勝林寺や三千院や來迎院や古寺青苔に封ぜられて、寒磬雲に響く。西の方、茅屋の間を行けば、兩山相迫りて、一道の溪流を壓す。石磴



寂光院本堂

の上、樹木を帶びたる土饅頭は、これ建禮門院の御墓なり。傍の一宇の古寺を寂光院といふ。門院の住み給ひし處なり。堂内に門院の御像ありと聞きたれど、普請中なればとて、拜觀を許されざりき。

思ひきやみ山の奥にすまひして
雲ゐの月をよそに見むとは

と詠じ給ひけむ門院が高倉天皇の中宮となりて、安德天皇を生み給ひし頃は、これ平家の得意の絶頂に達せし時なり。誰か圖らむや、國母の御身にして、かゝる山里の荒寺に墨染の御衣を纏ひ給はむとは。安德天皇には壇浦に死別れ給ひ、還るはもとの都ながら、御身はもとの御身におはせず。しば

建禮門院御木像

びつゝ言問はるゝにつけて、かゝる人々にはぐゝまれむとは思ひもかけざりしをとて、御涙をおとし給へば、女房達も皆泣く。九月の末に大原の雲を蹈み分けて、こゝの寂光院に

し東山の麓、吉田の里に世を避け給ひしが、文治元年卽ち壽永四年五月一日といふ日に、緑の黑髮剃り落し給ひぬ。御年まだ二十九なり。

一門の男子は世に盡きたれども、藤原隆房の北の方を始めとし、女の同胞は少からず。世を忍

入らせ給ふ。世をさくるには便よけれど、都に遠ければ、訪ふものとては無し。十月の十五日といふ日の暮れ方、散りつもれる楢の葉を蹈む音しければ、何人の來つらむと驚かせ給ひつゝ、見れば人にはあらで、鹿なりけり。大納言佐の局、

岩根蹈み誰かは訪はむ楢の葉の
そよぐは鹿のわたるなりけり

翌文治二年の夏の頃、後白河法皇こゝに御幸あらせ給ふ。その御道筋は鞍馬通りなるが、鞍馬の手前より右に折れて、靜原村を經給ひしなり。清盛にこそ御憤はおはしけれ、門院のあはれなる有樣を御覽じて、法皇も如何にあはれとおぼし給ひけむ。扈從せる後德大寺左大將實定は、

いにしへは月にたとへし君なれど
その光なきみやまべの里

この御幸ありてより五年の後、法皇の崩御に一年先立ちて、建久二年二月の中旬、三十五歳を御一期として、終にはかなくならせ給へり。大納言佐の局を始めとし、二三の女房、門院の御菩提を弔ふほどに、その身もいつしか相前後して逝けり。春風秋雨七百年、青山佳人の骨を埋めつくしぬ。池畔一樹の汀の櫻、年々空しく咲きて、空しく散る。

八　大原御幸

大原には淺ましき山家の御すまひなれども、流石に過ぎ行

春をとゞむるに
留春春不駐、春歸人寂寞、厭風風不定、風起花蕭索。（白樂天）

垣根や春をわが宿の垣根や春を隔つらん夏來にけりと見ゆる卯の花（源順）

く月日かさなりつゝ、文治も二年になりにけり。睦月は餘寒も未だ盡きず、風烈しく、殘雪も未だ消えやらず、谷の氷も打ちとけねば、法皇寂光院御幸の事、思召立ちがたなくて、彌生の半ばになりにけり。南面の櫻咲きて、梢ことなる淺緑、萌え出づる千草の色までも、折知顔にいとやさし。春をとゞむるに春とゞまらず、春歸りて人寂寞たり。何事につきても、日々に御行方は聞召したくて、けふや明日やと御心はすゝめども、垣根や春をへだつらん、夏來にけりと知らるゝは、そともに咲ける卯の花、葵をかざす祭も過ぎしかば、夜をこめて補陀落寺御幸とて出でさせ給ふ。

忍びたる御幸なれば、ふりたる車に下簾を懸けて奉る。近習

清原深養父
醍醐天皇御代の歌人。

おほあらきの森
山城國久世郡にあり。大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし（古今集）

の人々少々召具せらる。大江山の麓を過ぎさせ給へば、清原深養父が心をとゞめて立て置きし補陀落寺をがませ給ひつゝ、小鹽の山の麓、芹生の里、大原の別墅寂光院へぞ御幸なる。頃は卯月の半ばのことなれば、夏草のあげみが末を分け入らせ給ふ。道すがら舊苔拂ふ人もなく、寂寞の柴の庵には人もなし。人跡たえたる程を且は思ひやらせ給ふも哀なり。遠山にかゝる白雲は散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ思はるゝ。池の汀を叡覽あれば、おほあらきの森の下草茂りあひ、岸の青柳、絲みだれ、中島の松にかかれる藤、若紫に咲ける花、八重だつ霞の絶え間より、初音ゆかしき時鳥、をりしりがほにおとづれつゝ、けふの御幸を待

ち顔に、青葉まじりの遅櫻、風に知られぬ山陰は梢に殘りて幽なり。殘の花の水の面に散りしくを御覽じて、法皇御心のうちに、

池水に汀の櫻ちりしきて
波の花こそさかりなりけれ

西の山の麓に一宇の草堂あり。卽ち寂光院是なり。かの寺の眺望を御覽あれば、山復山、いづれの工か青巖の形を削りなさざれども、ふりにける石の色。水復水、誰の人か碧潭の色を染めざれども、落ち來る水の色。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし。野路に僧なくして、護摩の道場すたれ、香花を供へざれば、本尊佛像かうさびたり。甍破れて霧不斷

山復山
山復山、何工削成青巖之形。水復水、誰家染出碧潭之色。（大江澄明）

の香を焚き、樞落ちて月常住の灯をかゝぐ。北の山の奥に一つの草庵あり。卽ち女院の住ませ給ふ御庵室なり。軒には蔦、朝顔はひかゝり、垣には朽葉深くして、志のぶまじりのわすれ草、宿は葎のもぢをつゝ、鳥のぬしどに異ならず。瓢簞屢空し、草顔淵が巷に志げしとも申しつべし。柴の編戸、竹の透垣、たかすがき、竹のすだれも荒れはてて、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞をうるほすともいひつべし。四方に長山連なれり。わづかに言問ふものとては、巴峽の猿の一叫、爪木こる斧の音ばかりなり。かゝる閑居のありさまを忍びすぐさせ給ふらんと、思召しやるこそ悲しけれ。

御庵室に立入らせ給ひて、一間なる御障子をのぞかせ給へ

瓢簞屢空し
瓢簞屢空草滋顔淵之巷、藜藿深鎖雨濕原憲之樞（橘直幹）

巴峽
支那揚子江の上流にあり。附近に猿聲悲しとて著る。

三尊　彌陀、觀音、勢至。
普賢　菩薩の名。
八軸の妙文　法華經八卷。
善導和尚　支那唐代の高僧。
淨土の三部經　無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經。

ば、昔の蘭麝の匂に引きかへて、空薫れとにほへるは不斷香の煙なり。三尺ばかりの來迎の三尊、東向きにおはします。佛の左には普賢の繪像を掛け奉り、前には八軸の妙文置かれたり。右には善導和尚の御影を掛け、机には淨土の三部經、毎日の御所作と覺しくて、あそばしさして半卷ばかりに卷かれたり。傍なる御棚には淨土の御書ども置かれたり。又時々御慰みとおぼして、御草子ども取りちらし、御障子には諸經の要文、色紙に書かれたり。

又一間なる障子をあけて御覽ずれば、御寢所とおぼしくて、あやしげなる竹の簀子に敷きならしたる疊をしき、下にはわらびのほどろを敷きて、ふりたる敷皮引返してぞ置かれ

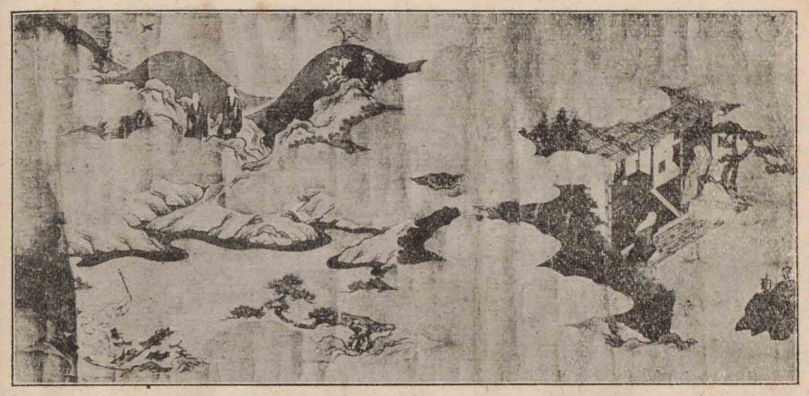
たる。御竿には、麻の衣に紙の衾をかけさせられたり。御休所とおぼしき處には、大和繪かきたる紙屏風を立て、女院の御手にてかくぞあそばされける。

思ひきやみ山の奥にすまひして
くもゐの月を見んとは

東の壁にふりたる琴、琵琶、一面づゝ立てられたり。管絃、歌舞の菩薩來迎の儀式を思召しやるにやと哀なり。かゝる御有樣を御覽ずるに、龍顏も涙せきあへずならせ給ふ。供奉の人人の直衣の袖もをぼるばかりなり。

かはりはてぬる世の中を淺ましと思召して、人やある、人やあると、宣旨二三度なりければ、老いたる尼一人差出でて、侍

因果經　過去現在因果經といふ。四卷あり。支那南朝宋の時代に中天竺の求那跋陀羅の譯せるもの。



大原御幸繪卷（寂光院什物）

ふと答へ申せば、女院はいづくかと御尋あり。この上の山へ花つみに入らせ給ひぬと申しければ、法皇あはれに思召し、世を遁れさせ給ふとはいひながら、手づからつませ給はずば、御事やかくべきと仰ありければ、尼さめ〴〵と泣き、泪をおさへて申しけるは、女院は入道相國の御娘既に天下の國母にておはしまし候ふ御事は、なか〳〵申すに及び候はず、因果經に、欲知過去因見其現在果、欲

知未來果見其現在因とあれば、善因に依りて后妃の位を得給ひ、惡因に酬いてかゝる憂き目を御覽ずとおぼし候ふぞ。されば、また昔に引きかへ、谷の水をむすび、峯の花を折り、難行苦行を修し、捨身の行をなし給はば、九品往生の蓮御疑あるべからず。悉達太子は淨飯王宮を出で、父の王に忍びて、檀特山に籠らせ給ひ、難行苦行の功に依りて、遂に正覺成らせ給ふ。彼は釋尊、此は女院、手づから花をつませ給ひ、世尊に手向け奉り給はんこと、何の御いたはりか候ふべきと申す。法皇此の尼のけしきを見給ふに、下にはたゞでなどのやうなるきぬに、上には墨染の衣をぞ著けたりける。かゝる身の有樣にて、かやうのことを申す不思議さよと思召して、汝はい

かなる者ぞと御尋ありけれども、ものばしは物も申さず、良久しくありて、申すにつけて憚多く候へども、一とせ平治の時、悪右衛門督信頼に失はれ候ひし少納言入道信西が子、辨入道定憲が娘、阿波内侍と申す尼にて候ふと申しければ、法皇聞召しもあへず、御涙にむせばせ給ふ。この内侍は御乳母の孫にて、殊に御身近く召使はれしかども、かはりはてぬる形にて、御覽じ忘れさせ給ひけるこそ哀なれ。

良久しくありて後の山より濃き墨染の衣著給へる尼二人、木の根を傳ひており來る。前に立ち給へるは、樒、つゝじ、藤の花入れたる花筐臂にかけ給へり。是ぞ建禮門院なる。一人の尼は爪木に蕨具し給へり。是は大宮太政大臣伊通の御子、烏

飼中納言伊實卿の娘なり。法皇は女院を見つけまゐらせて、上へ歩み向かはせ給へば、女院はかくとも知らせ給はで、下らせ給ひけるほどに、法皇を見つけまゐらせ給ひて、十念の柴の樞には攝取の光明を待ち、一念の窻の前には聖衆の來迎を待ちつるに、思の外に法皇の御幸ならせ給ひにけるよと、思召しけるに、胸うちさわがせ給ひて、消えも失せばやと思召せども、霜雪ならねば、それも叶はせ給はず、立隱れさせ給ふこともやと思召せども、霧霞ならでは、さるべき御事なかりければ、漸く歩み下らせ給ふ。あかの棚に花がたみ置かせ給ひて、かみの御ぞの上に御衣引きかけ、わらざをしかせ給ふ。昔の御名殘と思しくて、にび色の二つぎぬ、同じく上に

めされたり。別の間なる所に入らせ、御袖かき合はせて渡らせ給ひければ、法皇には、淺ましき御すまひかなとばかりにて、互に仰せ出さるゝ事もなし。あきれたる御氣色にて、御顔をのみ赤めさせ給ひけり。

（平家物語）

九　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼兼が討たれし後、召し捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣けにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、隱謀の企專らかの朝臣にありと載せたりければ、七月十一日にまた六波羅に召し捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは

俊基朝臣　藤原俊基。

七月十一日　元弘元年のことなり。

法令の定むる所なれば、何と陳ずとも赦されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと、思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻がり、紅葉の錦を著て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となればものうきに、恩愛の契淺からぬわが古里の妻子をば、行末あらず思ひ置き、年久しくも住みなれし九重の帝都をば、今を限とかへりみて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀なる。

憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く身をうき舟のうきしづみ、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋打

落花の雪　またや見む交野のみのの櫻狩花の雪散る春の曙（藤原俊成）

紅葉の錦　朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦著ぬ人ぞなき（藤原公任）

うねの野　近江より朝立ちくれば、うねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は（古今集）うれの野は蒲生野といふ。滋賀縣近江國蒲生郡にあり。

時雨も　白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色つきにけり（紀貫之）

鳴海潟　さ夜千鳥聲こそ近く鳴海潟傾く月に潮や滿つらん（藤原季能）

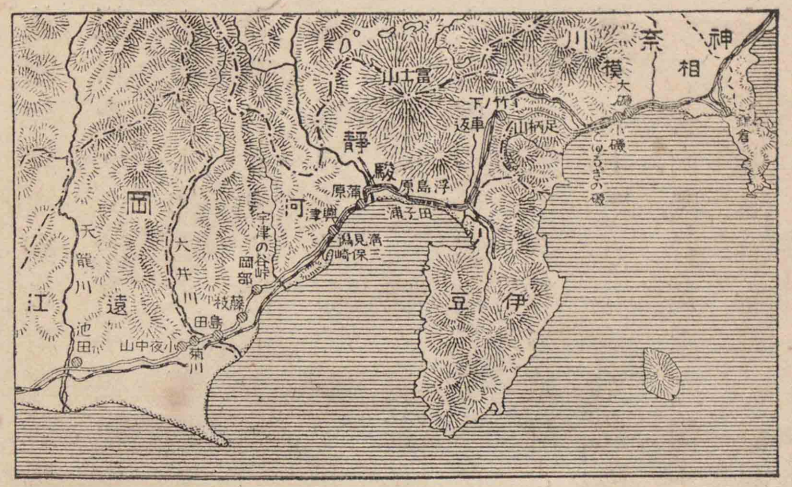
渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく、もり山の木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、さゝ分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいその森の下草に、駒をとゞめてかへりみる故郷を雲や隔つらん。番馬、醒井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋のあめ、いつかわが身の尾張なる熱田の八劔伏し拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に曳く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の入相なれば、今はとて池田の宿に著き給ふ。

命なりけり　年をへてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

旅館の燈火幽にして、雞鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が命なりゝりと詠じつゝ、二たび越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に昇れば、餉進むる程ぞとて、輿を庭前に舁きとゞむ。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に因つて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。　今東海道菊河。

汲下流而延齡。　宿西岸而終命。



龜山殿
京都嵯峨なる龜山の離宮。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへも
かゝるためしを菊川の
同じ流に身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、

清見潟
清見潟浦風寒き夜なゝは夢もゆるさぬ涙の關守（院大納言典侍）

上なきおもひ
富士のねの煙はなほも立ちのぼる上なきものはおもひなりけり（藤原家隆）

今は二度見ぬ世の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田、藤枝にかゝりて岡部の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に宇津の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ涙の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穂が崎、興津、蒲原うち過ぎて富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひにくらべつゝ、明くる霞に松見

えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き船うけて、おり立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ足柄山のたうげより、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけり。（太平記）

荘周が夢
昔者荘周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也。俄然覺、則蘧蘧然周也。（荘子）
古今の序に

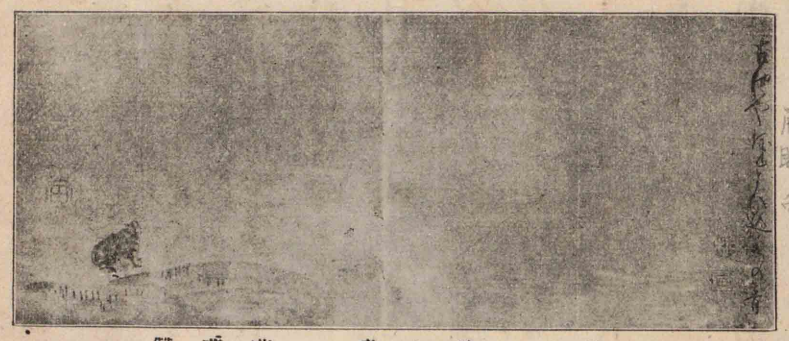
一〇　百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ荘周が夢も、この物には託しけめ。

蛙は、古今の序に書かれてより歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで、翁の目覺したれば、このもののことさらにも謗り難し。

花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。（古今集序）
翁
松尾芭蕉をいふ。



蛙　許六畫　芭蕉贊

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かぬに、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えずと、このものの上は翁の一句

やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲

に盡きたりといふべし。

螢は、比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。

貧の學者 晉の車胤をいふ。

日ぐらしは、多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つく〳〵ぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死にて、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。ひ

とへに奸賊の心ありていと憎し。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらんか。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲はたがために身を焦すにか。蜉蝣はかなきためしに引かれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。

横井也有及び自畫

同じ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、黃金蟲はいやし。蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西

槐安の都
淳于棼醉夢入大槐安國、見王。王曰、吾南柯郡・屈卿爲守、居凡廿載、使者送出穴、遂寤。尋古槐下蟻穴、洞然明朗、乃槐安國、又一穴直上南枝、卽南柯郡也。（異聞集）

千丈の堤
千丈之堤以螻蟻之穴潰。（韓非子）

原
靜岡縣駿河國駿東郡。

吉原
同富士郡。

に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれてその身の安きことを得ん。さるも、たよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蝸牛は只水にあるべきもののいかで草葉に遊ぶらん。家もちたれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣、をさ蟲の數多きは不用の事なり。

螳螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ、原、吉原を駕籠に乘りて富士を眺めゆく人には似たり。

つゞりさせと
秋風に綻びぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく（在原棟梁）

われからと
あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば怨みじ（藤原直子）

促織、鈴蟲、轡蟲は、その音の似たるを以て、名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛おひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一つ在所に二人の八兵衞ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蟋蟀はつゞりさせと人のために夜寒を敎へ、藻に住む蟲はわれからと、たゞ身の上を歎くらん。蓑蟲のちゝよと呼ぶは、父のみ戀ひてなどかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたらん、または長月の頃、力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり燒

く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は、殊にはげしきを、かの七賢の夜ばなしには、いかに團扇の隙なかりけん。

七賢　晉の嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎をいふ。

一一　心の國

武島羽衣

ひさかたの空のをちより、
あらがねの地のこゝまで、
吹きわたり行かぬ隈なき
天つ風、やよ言問はむ。
いづこなる野にか山にか、
世の塵を清く離れて、

現身の苦知らぬ
處ある、知らば語れや。
庭の松さと音づれて、
吹く風はわれに答へぬ、
否、君よ、われは知らずと
天地のはてのはてより、
わたつみの奥の奥まで、
立ちわたりゆかぬ隈なき
白波よ、やよ言問はむ。
いづこなる瀬にか淵にか、

悲のとはに來らず、
喜の滿ちあふれたる
處ある、知らば語れや。
大岩にさと碎けつゝ、
散る涙はわれに答へぬ、
否、君よわれは知らずと。

あゝさらばみ空の月よ、
惠ある光はなちて
眠る世をまもれる月よ、
汝がめぐる空のいづこに、

世をわぶる人の心の
なぐさまむ處かあると、
わが問ふを、知らば答へよ。
たゞよへる雲のうしろに、
さしかくれ、月は答へぬ、
否、君よわれは知らずと。

われかくて思ひわづらひ、
まどろめば、夢にいつしか
たどりくる黃金のうてな、
人あまたわれを迎へて、

溫けき情の言葉、
こまやけき惠の心、
けふまでのなやみ忘れて、
天國に生れし如し。
あはれ、げに日頃たづねし
住み處こゝにありけり。
さるにてもいづこならむと
いぶかしみ、仰ぐかなたの
扁額に、いとあざやかに
ふと〳〵としるしたりけり、
ほかならぬ「心の國」と。

一二　狂歌

狂歌の由來を尋ぬれば、早く萬葉十六の卷に戯咲の歌あり、古今集にも誹諧歌あり。これ卽ち狂歌の起源にして、鎌倉時代以後、次第に發達して、江戸時代に入り、和歌の復古革新の行はれたるにつれて、ます〳〵發達し、流行を來して、四方赤良、宿屋飯盛等盛にこれを玩べり。これまた太平樂天の一産物なり。

狂歌の興味は全くそのパロデーたる點に存す。卽ち古歌を基本としてその興味は成立するなり。和歌に古今和歌集、千載集あれば、狂歌に古今馬鹿集、德和歌萬歲集あり、歌集の名

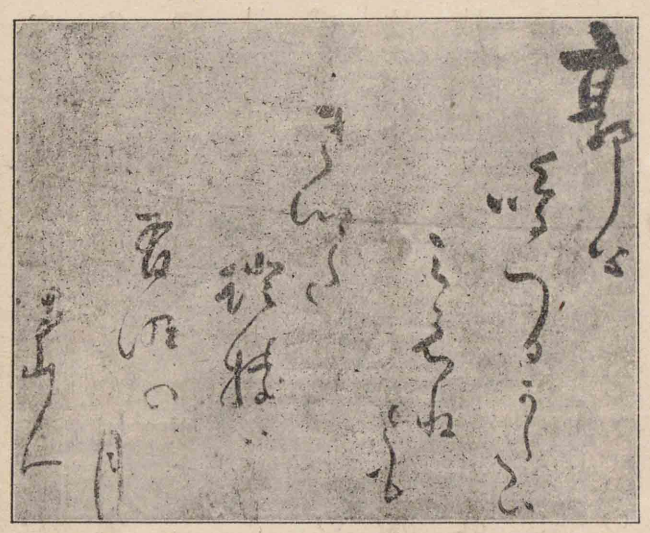
に已にパロデーの戯を弄せり。故に作者の狂名もまた常に古代の歌人の名をもぢりて、紀定丸紀津丸、濱邊黑人、智惠内子などといふ。されば、その歌の形式またもとより三十一文字とす。凡そ三十一文字の歌は嚴密に古語を用ゐざるべからず、

必ず古來の約束に從ひて特殊の題目を詠まざるべからず。和歌の趣味は古代にあり、古代の回顧、古代の聯想は實に和歌の生命なり。公卿のもの、雲上のものとして、品位高く野鄙

ならざるを以て、その價値となす。三十一文字はこの種の詩の形式として久しく用ゐ來られたり。今これに盛るに卑俗の事物、近代の思想を以てし、卑俗の語句を以てこれを作る。是に於て習慣の力は形式と内容との全く一致せざるを感ぜしむ。これ卽ちパロデーの興味の生ずる所以なり。

故に狂歌の準據は常に古歌に在り。人口に膾炙せる名歌を捕へ來り、巧にその音調を眞似て、別に世俗の事をいふものあり。或はその一半を採りて下の句には全くこれに相應せぬ他事を結合せしむるものあり。或は古歌の典故を採り、或は歌人の逸話に本づき、皆これに古歌とは何等の關係なき寧ろ古歌には詠ずべからざる事物を聯結せしめて、その滑

稽を構成するなり。渾然たる和歌の調の上に世俗の事をいふがをかしきなり。古歌にはかつて見たることなき卑俗の語のかけ詞として用ゐらるるがをかしきなり。莊重なるべき神聖なるべき古歌をして、卑俗の事に化せしめたるものなり。眞率なる和歌をして戲咲の資となしたるものなり。



四方赤良書

狂歌の興味は和歌ありて始めて存在するものにして、和歌を知るものにあらざれば、これを理解すべからざること、猶本歌取の本歌を知らざるものに興味の索然たるが如し。狂歌の中もとより古歌の語句に關係なきものもあれども、その語句には「けり」「らん」などの古語を用ゐ、三十一文字の形式を襲ふことに於て、始めてその趣味を感ぜしむるものにして、これを平語にしては滑稽とはならざるものなり。狂歌の流行は蓋し國學和歌の流行より起れる一現象たりしなり。

（國文學歷代選）

山里は散りし紅葉の錦をも木綿ほどにはおもはざりけり

朱樂菅江

菜もなき膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の

夕暮　唐衣橘洲

雪ならばいくら酒手をねだられん花のふゞきの志賀の山ごえ　馬場金埒

ほとゝぎす自由自在にきくさとは酒屋へ三里豆腐屋へ二里　つぶり光

心なき身にも涙はこぼれけりあくびのあとの秋の夕ぐれ　紀定丸

世の中は何のへちまと思へどもぶらりとしては暮されもせず　木端

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來にけり　蜀山人

時鳥なきつるあとにあきれたる後德大寺のありあけの顔　同

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してたまるものかは　宿屋飯盛

宿屋飯盛筆

鹿都部眞顔筆

爭はぬ風の柳の絲にこそ堪忍袋ぬふべかりけれ　鹿都部眞顔

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれけれどもけれどもさうぢやけれども

鯛屋貞柳

一三　狂句

狂歌の戯は、前句附と稱して、かねて下の句を定め置きてこれに相應する上の句を附することを流行せしめたり。一首の歌を十四文字十七文字と分割せること、かの連歌の戯の如し。是に於てその前句は遂に獨立して川柳と稱する一詩形をなすに至れり。これなほ發句の獨立して俳句となれるが如し。

この前句附の附合は風流文雅の士の間に行はれずして、も

と市俗間の遊戯に出で、ひたすら機智頓才を競ひたるものなりき。故に自然の景色を詠出すること尠くして、日常社會の人事を詠ずるもの多く、その詩形の單簡なるは最も譏刺に適せるを以て、遂に專ら世の風俗人情の微を主題とするに至れり。川柳點の穿といふもの卽ちこれなり。俳句と川柳と同じきは形のみ。滑稽洒脫の點に於ても兩者類を同じくするが如くなれど、俳句は必ず自然を伴なはざるべからず、卽ち人事と自然景との聯合によりてその詩趣を味はしむるを常とす。川柳にありてはこの自然景の聯合を要せず、單純に社會日常の事件のみに就いてその弱點を指摘し、その習癖を擧げ、鋭敏なる觀察、奇警なる單語、寸鐵人を殺すの

概あるを尚ぶ。學者はその學者然たるところ、坊主はその坊主然たるところ、僅にその言動の一端を捕へて直ちにその風采を想望せしむるの妙あり。田舎人、居候、下女の如きも常に好箇題目にして、その無學、文盲、大食、健忘等は常に嘲笑の材料に資せらる。親子の關係、嫁姑の關係、放蕩息子、不貞の寡婦、娘形氣、いづれも輕妙奇警なる片言を以て、その不用意不謹慎なる言動にのみ可笑滑稽の材を採り、決して眞摯眞率の方面を看取せず。その可笑滑稽の處卽ち諷刺のあるところ、江戸子の機敏頓智と樂天洒落の性質とを反映せる產物たり。卑俗見るに堪へざるものまた多し。

句形は俳句と同じく十七文字なれど、その句の終止形を用ゐずして、連用形を用ゐたるものの多きは、著眼すべきところとす。連用形は卽ち中止の形、半ば言ひさしの方なるを以て、其の言動の一部を示してなほ繼續の意あり。又常在たるの意を示すに足るがためか。終止形とすれば已に完結せる一事件を抽象的に取りて觀察する趣ありて、活動の姿に乏しきためなるべし。狂歌はむしろ言語の戲にして、これは卽ち事實の滑稽なり。

柄井川柳

柄井川柳始めて俳風柳樽と稱してその選集を出ししより、柳樽の印行は數十卷に至れり。川柳の號もまたその技に巧

なるもの相嗣いで今日に至れり。然れども末期に至りては
その句遠く安永天明の昔に及ばず。
新宅をほめる座頭はとげを立て
武者一人叱られてゐる土用干
おさへればすゝきはなせば蚤
わらぢくひまでは能因氣がつかず

安永、天明共に將軍德川家治の時の年號。今より百三四十年前。

孝靈四年あれを見ろあれを見ろ
うたゝねの顔へ一册屋根にふき
金もちの人魂ゆきつもどりつし
くひますかなどと文王側へより
降參がすむと一度にひだるがり

（國文學歴代選）

鶏があくびをしたとつんぼ言ひ

一四　夏十句

寺荒れて仁王にせまる若葉かな　醒雪（明治時代俳人）
五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉
湖の水まさりけりさつき雨　去來（芭蕉門人）
五月雨や大河を前に家二軒　蕪村
いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥　貞室
時鳥啼くや湖水のさゝにごり　丈艸
早ずしや東海の魚背戸の蓼　子規（愛媛縣松山人）
祇園會や錦のうへに京の月　同

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな　園女
夕すゞみよくぞ男に生まれたる　其角

一五　嶽上の奇

遅塚麗水

已に四合目に至れば、足柄、愛鷹及び甲州の諸山は、皆余が鞋底にあり。大地の蒼々然たるところに、兩碧の甚だ明なるを見る。南なるは富士の沼にして、東なるは甲州山中の湖なり。小なること盆池のごとし。膚寸の雲の帶び得たる雨を受くとも、水は當に四坡に横溢すべきかと疑はる。皆を決すれば、東海の濱一帶百里、水は南溟の雲に入る。その間を斷ちて霓よりも澹きもの一道走る。これ紫瀾の岸を打つて回る影なり。時は暮に近し。雲あり、相逐うて上峯より落ち來り、皆下界に堆屯して流れず。風の吹き披くあれば、青絲を穿ちたる銀針ありてこれを縫ふ。その青絲に似たるものは、これ田子浦に浮かべる三保松原か。何ぞそれ纖々として縷の如き。その銀針に似たるものは、これ富士川か。三十六瀨、何ぞそれ一芥を浮かぶるに勝へざる。

既にして山影皆消ゆ。雲既に人寰を鎖せり。嶽上の奇は將にこれより始らんとす。忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり。一望平布の雲は爭ひ立ち、羊角して嶽に登る。これ風雨の將に來らんとするなり。雲急に余を追ふ。余乃ち遙方の石室を望みて走る。雨は逆上して濺ぐこと亂雹の如し。草帽飛ばん

とすること數次、身は雲と相先後す。漠々たるもの既に行縢を沒せり。超乘して走りて纔に石室に到れば、雲は既に咫尺にあり。余を石室のうちに窮追して、更に上峯に向かつて走る。石室の人哂つて迎へて曰く、これ過雨なり、頃刻にして霽れなんと。言未だ終らざるに、黑風白雨室に滿つ。膝を抱きて俟つことしばらくにして、石室の戸に微紅あり。走り出でてさきに余を追ひし雲を望めば、既に上頭の寶永山に觸れて碎け、更に夕暉に照らされて、雨は萬顆の珠璣となり、紛々として中天より落つ。手を擧げてこれを受くれば、光彩一瞬にして消え、たゞ衣上新に亂暈の痕を添ふるのみ。顧て人寰を見れば、正にこれ黃昏なり。夕暉の前に雲あり、奇峯を成して

爭ひ立つ。皆日を啣めるがために紅くかゞやき、周圍に金精の色を放てり。

既にして朱丸の如き夕暉急下すれば、奇峯忽ち沒し、天地寥寥として、皎然たる大月虛明に浮かぶ。指を屈すれば、今宵はこれ陰曆六月十一日なり。金剛杖を横たへて、看ること暫くにして、殆ど我あるを忘る。仰いで上峯を望めば雲あり。俯して下界を瞰れば雲あり。上下の雲間に、たゞ鐵よりも黑き一大絕壁の斜に懸垂するあるのみ。四顧すれば、縹緲蒼茫、身は天柱を攀ぢて紫微に入る想あり。この遠高の景に對しては、口言ふこと能はず、筆描くこと能はず。神澄み、氣清く、愴然として涙の隕つるを知らず。

一六　山の歌

筑波嶺のこのもかのもにかげはあれど君が御蔭にます　讀人しらず

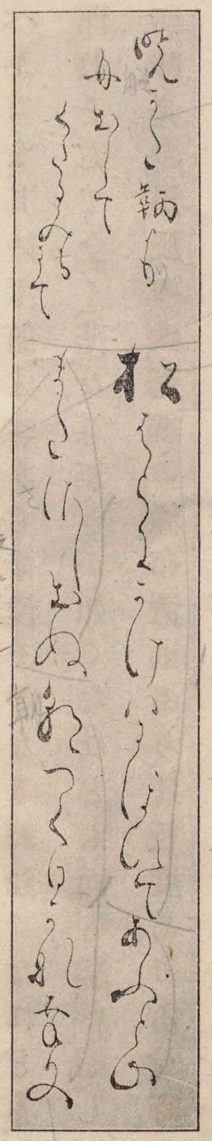
かげはなし
しなのなる淺間のたけに立つけぶりをちこち人の見や　在原業平

はとがめぬ
心あてに見し白雲はふもとにておももぬ空にはるゝ富士の嶺　村田春海

ぬじの嶺を木の間木の間にかへりみて松のかげふむ浮島が原　香川景樹

あかつきのかすみの上に大比叡の山のたかねはあらは

れにあり
木下幸文筆



木下幸文

以前松找いまもあきたるゐら鷲のゆくへに見ゆるえぞ乃遠山　落合直文

一七　自然に接せよ

樂しきかな、夏季の學生や。學期方に終を告げ、四旬の休暇、一塵の身邊を累す無し。身は輕禽に比し、心は游鱗の如く、西に

東に、舟に車に、將に都門を去らんとす。あゝ學生諸子、それ何處にか行かんとする。誠に艶羨すべきかな。吾人夏季に遭ふ毎に切に懷往の情に勝へざるなり。今や身世倶に移り、江湖の風月に負く事茲に幾年。せめて遙に諸子の樂境を想像して聊か懷を遣らんかな。

それ天地は大人物なり。山水語らず、日月言はず。其の高仰ぐべからず、其の深俯すべからず、漠々限なきが如くなれども、渾然として全く、茫々意無きが如くなれども、而も鑿々として味あり。星辰の大、毫絲の微、布置則あり、運行度あり。雷霆時に怒れども地動かず。風雲時に號べども天常に澄む。悠然として彼蒼を仰げば、虛しきが如く、滿てるが如く、情時に怫鬱、

意時に蕩逸、或は怡懌虛無なるが如く、或は縱横卓犖なるが如く、氣象萬千、意料究り無し。顧て人間を眺むれば、拘々切々、濁氣途に薰蒸す。眞に慚死すべきなり。是を以て大人は常に自然を師とす。

自然を師とする者は自然を解するの法を知らざるべからず。自然を解するの法、唯己れを虛しうするにあるのみ。山嶽の瑰奇、河海の浩茫、風雲雷霆の奇觀、心を虛しうして之に對すること久しければ、一氣自ら恍惚として直ちに造化の樞機に參し、身世共に遺れ去りて、天地我と一體たり。忽然として煙火の境に歸るとも尙志氣遼遠、雄心腹に滿つ。此の間一物の微、杳として語るべからざるものあり。かの磅礴渾茫直

ちに天より下り、父師に依りて立たざるもの、神聖雄奇の極に參して、反りて正々堂々に歸す。達人の事業亦此の如きのみ。人は法を造り、而して法に苦しめらる。大人物は常に人法を以て天則を遺れず、顧てかの自然に學ぶ。之を規し之を矩し、朝に一頭を描き夕に一角を畫する者、竟に墨士槧人の伎倆のみ。

能く自然を解する者は、常に能く自然を大觀す。幽溪小壑の奇を喜ぶ者、未だ與に天地の大文章を語るに足らざるなり。かの泰嶽の直ちに天と接する底の壯觀は、斷橋落澗の景に見るべからざるなり。

山は其の高きを欲し、水は其の廣きを欲す。千峯趨り、萬巒走

環り、繞周匝、拜するが如く、揖するが如く。矗立萬丈、四海を瞰視して之に臨むもの、眞に天地の雄物にあらずや。若しそれ煙波浩蕩、千里一碧、一旦空回り、雲昏く、海水天風渙然として相遭ふや、濆薄吹盪、渺として際涯無く、萬頃の波瀾澎湃動蕩、亦眞に天地の偉觀にあらずや。大人物の規度多く玆に出づ。顧て人生名利の巷を望めば、誰か其の孑々焉たるに驚かざらんや。

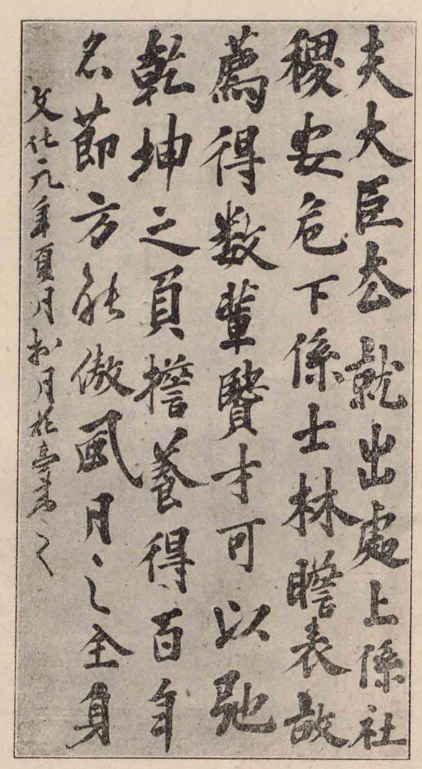
書は能く人を教へ、自然は能く人を造る。社會は能く人を制裁し、自然は能く人を解放す。人をして其の本に歸らしむるものは自然なり。社會も亦時に自然に歸るを要す。自然は何れの時代に於ても進歩の標準なればなり。

夏季の學生は自然の友たらざるべからず。實際の人生に入るに先だち、出來得るだけ自然の啓沃に接せざるべからず。是未來に於て青年の純潔と大望と理想とを活現する所以なり。

一八月

松平定信

月のさしのぼるころ、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるに、やゝにほひそめたれど、遠山の梢にいざようて、姿も見えず、からうじてさしのぼりけり。梢のうさもはれにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近よるほど、あやにくに月のかたより雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばし打ちまもるに、雲のはしつかたあかう見ゆるにぞ、出ではなれたらば、はやかゝらんくまはあらじと思ふに、いつのまにか、また白雲の月待ちがほにたなびきてみゆれば、胸打ちつぶれてうちみるに、初のくもより出でたる光いとあたらしうみえて、ことにさやけし。かの待ちゐたる雲にむかへば、またはせ入るもいとつらし。月の入りてみれば、雲もさすがにこちたからず。こゝかし



松平定信書

この書は安政六年四月十三日松陰が萩の野山の獄にありてその長妹千代子に與へたるもの。

こにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらにうらみはてでみゐたるうちに、衣手もしめりゆきて、露もむしのねもさかりなりけり。つくづくとむかひゐたれば、心のはてなきやうにこそおぼえしか。

一九　妹にさとす

吉田松陰

この間は御文下され、觀音樣の御洗米三日の精進にて頂きゐやうとの御事、御深切の御志感じ入り申ゐ。精進潔齋などは、隨分心のかたまりゐものにて宜しき事と存じゐに付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで、少々志のゐへば、酒肴ども一向食べ申さずゐ。その間一度靈

神樣御祭のもの頂戴致ゐばかりに御座ゐ。まして三日の精進はさまでむづかしき事にも之なく、御深切の事にゐへば、相果したく存じゐへども、當所にては、あたりまへの精進の外に又精進と申ゐへば、連中又は番人ども、何故と怪しみ尋ねゐに付、それをそれと相答へゐ事面倒に存じゐ故、八日はさいはひ精進日なれば、その日一日に

吉田松陰

ちんぢ
長州の方言にて微塵の意。

頂き申候。

抑、觀音様信仰せよとの事は定めし禍をよけゐ爲なるべく、是には大いに論のあることにゐへば、委細申進ずべくゐ。法華經第二十五の卷、普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれありゐ。大意は、觀音を念じゐへば、繩目に懸りゐへば、忽ちぶつ〳〵と繩が切れ、人屋に囚れゐへば忽ち錠鍵が外れ首の座に直りゐへば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれありゐ。是は拙者江戸の人屋にてこの經を幾度も繰返し讀みて見ゐへども、始終この趣にゐ。それ故、凡人はこれより有難き事はなしとて信仰するも無理はなくゐ。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれありゐ。小乘にて申ゐへば、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座ゐ。是は大いに信を起さする爲なり。信を起すとは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨みゐうてもちつとも頓著なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられゐゆゑ、世の中に如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣ひはなし。されど、初より凡夫に一

心不亂の、不退轉のと申聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、かりに觀音樣を拵へて人に信を起させゐ敎に御座ゐ。これを方便とも申ゐ。

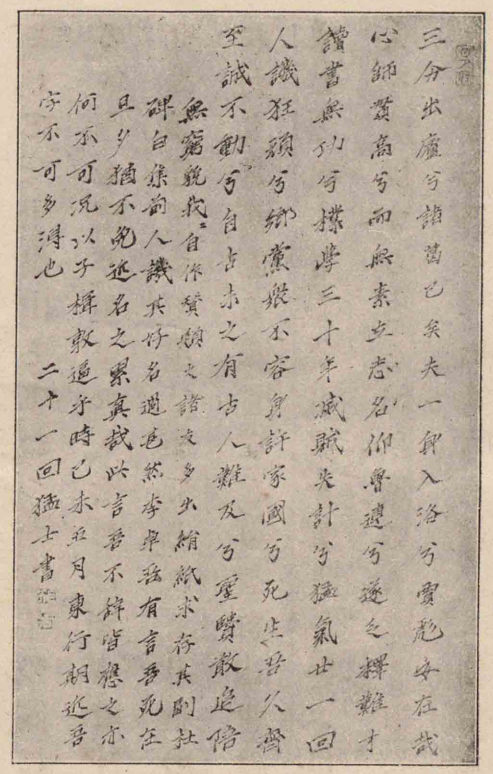
扨又大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座ゐ。出世と申ゐうても、立身出世など申す事には御座なくゐ。その初は、釋迦が天竺王の若殿にゐひし處、若き時より感の强き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てて、年二

十五の時位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られゐ。

さゐて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生まれもせねば老もせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で來て、それより世の人を敎化せられたり。是が卽ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは卽ちこの世の人を濟度することに御座ゐ。

さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の、孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば有難がりもし、恐もするなり。果して死なぬにゐは

ずや。死なぬ人なれば、縄目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りにはゐはずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃ものに身を失はれゐへども、今以て生きて居らるゝなり。卽ち刀のちんぢに折れたる證據なり。


三分出廬兮諸葛已矣夫一卿入洛兮賈誼安在哉
心師賢高兮而無素丘老名仰魯連兮遂之釋難才
讀書無功兮揖學三十年滅賊矣計兮猶氣世一回
人識狂顧兮卿黨樂不容身許家國兮死生哲人齊
至誠不動兮自古未之有古人難及兮空贊歎追倍
無寵貌我自作贊頌之諸文多少給紙求存其間社
稷白集前人識其好名遺色然李卓吾有言吾死在
旦夕猶不免延名之累真哉此言吾不解皆想之亦
何不可況以子輝教過乎時已未五月東行朝近吾
字不可多得也　二十一回猶士書

題肖像　吉田松陰書

禍福縄の如し
禍之與福兮、何異糾纆ゝ（漢書）

人間萬事塞翁が馬
淮南子人間訓に出づ。

滿盈
天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙、人道惡盈而好謙。（易經）

ゐ。禍が福の種、福が禍の種、人間萬事塞翁が馬に御座ゐ。拙者など人屋にて死ぬる事にゐへば、禍のやうにゐへども、また一方には學問も出來、己れのため、人のため、後の世へも殘り、かつ〳〵死なぬ人々の仲間入りも出來ゐへば、福この上もなき事にゐ。人屋を出でゐへば、また如何なる禍の來んも知れ申さずゐ。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば先には福あるべし。何の效驗もなき事に觀音に賴みて福を求むるやうの事は必ず〳〵無益に存じゐ。

尤も右の通に申ゐへば、身勝手なる申分、不幸なる申分と御存じあるべきが、こゝにまた論あり。易の道は滿盈

兄樣 杉民治。

小田村 松陰の次妹壽子をさす。小田村素太郎に嫁せり。

と申すことを大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまのわるきやうなるものなれど、あと四人はいづれも可なりに世を渡られ、特に兄樣、そもじ、小田村は兩人づゝも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。これ程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはふざまのわろき人も隨分あるなり。然れば父母兄弟の代りに、拙者、艶、敏の三人が禍を受くるにこそと思ひゐはば、父母樣の御心も濟まるゝ譯にはゐはずや。かつ杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは却つて杉が氣遣ひ

山宅 松陰の父なる杉常道隱棲の地。萩城の東方護國山麓にあり。

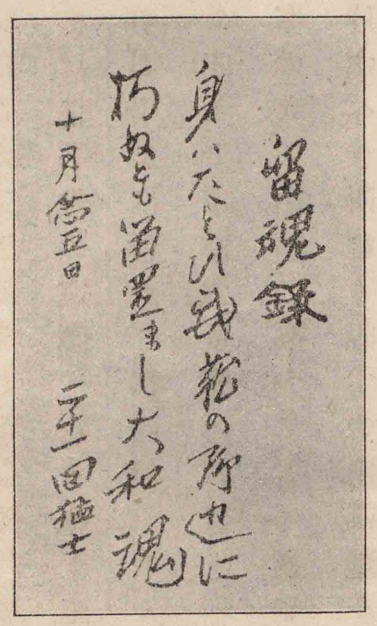
なるものなり。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あれども、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの樣なるものと思ひて、昔山宅にて父樣母樣の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣ひなるものにてはゐはずや。去年も端午に客の多きを、人はめでたし〳〵と嬉しき顏をすれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。

小太郎
杉民治の子。

久坂
松陰の季妹美和子をさす。久坂義助に嫁せり。

若しや、萬一小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し〳〵。父母樣の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久坂などは尙以ての事。されば拙者の氣遣ひに觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に樂は苦の種、福は禍の本と申す事をとくと申聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟の內に一人にてもふざまのわろき人あれば、あとの兄弟の心が自然と和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦ましくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受負ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父母樣へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父母樣の御仕合はせ、また子供が見習ひねはば、子孫の爲是程めでたき事はなきにあらず



吉田松陰筆辭世

やゝよく〳〵御勘辨ゐうて小田村、久坂なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに心學本なりと折々御見ゐへかし。心學本に、

のどけさよ願なき身の神まうで
神へ願ふよりは身に行ふが宜しくね。

二〇　世界の四聖

高山樗牛

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば誰かこれを能くせん。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼びて世界の四聖と稱す。宜なるかな。

四聖の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の内釋迦を除いては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盗賊と竝びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺なりといふべし。然れども、これらの人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するがごとし。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つてわが道行はれずんば、われ何を以てか後世に見えんと嗟歎せり。釋迦は衆生のために妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、正義を信ずる者に取りて死はた何爲るものぞ、われをして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷を覺さざるべからずと。基督はおのれを罪に

陷れたる者のために神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

四聖は、その生まれたる處と時とを異にす。故にその教理にもまた多少の差違なきを得ず。今その要を擧ぐれば、左の如し。

釋迦　橋本雅邦筆

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死

いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は我の一念に執著するにあり。故に吾人は我の一念を脫却して無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子　狩野探幽筆

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあ

り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うすること能はざる者多し。教育の要是に於てかあり。既に教育を受けて、身既に修りなば、家自ら齊ふべく、家齊ひなば國自ら治るべく、國治りなば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は所謂知德合一說なり。おもへらく、眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の滿足なり。靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中にありと。

ソクラテス（ナポリ博物館藏）

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年

山上の垂訓　新約全書馬太傳に出づ。

傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、心の貧しき者は福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清き者は福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵すること勿れ。人もし汝の右

基督レニヽ肇

の頰を打たば、左の頰をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義をその前に行ふこと勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむること勿れ。僞善者の行に倣ふこと勿れ、隱れたるを鑒みたまふ神は顯に報いたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ、人の目にある塵を見ながら何ぞおのが目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ、沈淪に至る門は闊く、その路は大きく、これに入る者は多し。嗟吁いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得る者の少きぞ。およそ、この訓を聽きて行ふ者は、

磐の上に家を建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如しと。基督教の精髓は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓を出でず。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尙凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なること、それ何を以てかこれに比せんや。

二一　我果して我を觀得る乎

加藤咄堂

相識天下に滿つとも、眞に我が心を知る者、それ幾人ぞ。天下の我を觀るもの、豈我に優るものあらんや。我の人に接するや、必ずしも自我の全部を開示せず、或は他の意を迎合し或は他の見に雷同し、言ふべきを言はず、爲すべきを爲さざること多し。されば具眼の士ありて、他人の思想の奥底を忖度すといふとも、畢竟忖度は忖度のみ。又我我を觀るも、必ずしも精ならず。自ら觀得たりとする所に幾分の身贔屓あり、看破し了せりと信ずる所にも、亦我執あるを免れず。かくて他は我を盡くさず、我亦我を知らず。我が性格、我が力量、我が識見、我が智慧、抑誰によりてか明なるべき。

人の我を觀ると、我の我を觀るとは、稍その趣を異にす。人の前には覆ひたる部分も、我が前には覆ふを要せず。他には包

むべきことも我には包むを須ゐず、我が汚所、短所、濁所、愚所は、悉く暴露し來りて我が前にあり。若し些の我執を抱くなくして之を觀ば、多少の身贔屓ありとも、亦人の我を觀るより優るものあらん。四隣人なき時、靜に我我を想ふ。過去に於ける我は、意識の流に伴なうて、繪卷物の如くに展開し來り、現在に於ける我は、心の歩に從つてパノラマの如くに現じ來る。心眼尙及ばざるものありとも、我が眞相は略明瞭なるにあらざるか。我は今我が法廷に引き出されたるなり。身贔屓は言を巧にして辯護の勞を惜しまず。我執は力を極めて酌量の情を陳ぶとも、我には又我を詰責し、我を嚴罰する判官ありて、終に悚然として其の公明なる判決に服せざらんとするも得ざらしむ。

而して此の時に與へられたる判決は、おのづから二途に分る。卽ち一は自己の微小を感得せしむるものにして、他は自己の偉大を覺了せしむるものなり。微小を感得しては、追恨の情轉た切にして、懺悔の涙いとゞあきりに、偉大を覺了しては感慨の念油然として湧き、發奮の氣勃然として起る。湧くものは向上の神泉にして、あきりなるものは靈覺の動機なり。微小と感じたるも偉大と覺りたるも、所詮は一路、濁惡の凡夫、此に絕對の信念を得、聖凡不二の感想、終に自覺の神域に到る。自力といひ他力といふ、その名異なりと雖も、宗敎の發足點は、まづこの我我を觀るの驛程より出でざるはな

ヨルダン河　アジヤトルコのシリヤにあり。
ヒラ洞窟　アラビヤのメッカの北なるヒラ山中にあり。

し。我やもと觀易からず。然れども觀得て此に至らば、決して徒勞にあらず。一切の宗教が内觀を說き、一切の聖者が靈覺に起るも、皆この我を觀、我を觀しめんとしたるに外ならず。釋尊菩提樹下の端坐は言はずあれ、基督がヨルダン河畔の逍遙も、マホメットがヒラ洞窟の默想も、皆この我我を觀たるものにして、止觀、禪定、靜坐、冥想の教も、究竟は我我を觀よと奬めたるに過ぎじ。觀難しと雖も、觀得て徹底の處に到れば、我が心事、我善く知得す。我を知らざる毀譽豈問ふを要せんや。その言ふ所は我が眞相にあらず、その語る所は我と沒交渉なればなり。かくて曾ては天下一人の知己なきを嘆じたりし我、今は知己到る處に伴なひ、赴く所に隨ひて、攝取の靈光永く我を捨てず。

然も此の如きは聖者靈覺の跡なり。偉人修行の極なり。今の我は果して能く我を觀得るか。辯護の人は備れども、心裏の法廷は堅く閉ぢ、我終に我に下すに公明なる判決を以てする能はず。徒らに門外の辯護の言を聽いて、獨り自ら得々たるに過ぎず。宇宙は主觀の表現たり、而してその主觀の體は摸稜。天地は自我の感想なり、而してその自我の貌は曖昧、爲に愛憎好惡多く我より出づ。愛好する者の言は、毀も亦譽と觀じ、憎惡する者の語は、譽も亦毀と見る。好惡は我に在りて他に在らず。毀譽も亦他に在らずして我に在り。今我得力足らず、修養功を缺き、その觀る所、摸稜曖昧たるを免れずと雖

も、聖者靈覺の跡を辿り、偉人修行の極を探り、他を觀るの明を飜して、我を照らさば、又他の我を觀るよりも明なるものあらんか。かの主觀の體たり、自我の貌たる我を姑く客觀の地位に置き、榮辱を拋ち、利害を棄て、我を觀る他人の如くならば、身贔屓なく、我執なく、覆ふ所なく、包む所なし。我我を觀るの法、之に過ぎたるはなし。若しそれ我を絶對化して大靈の光明中に沒入せしめ、心佛衆生是三無差別なるの妙境に至るを得ば、我を觀るの能事了ると雖も、是我が理想なり。今の我は到り易からず。暫く此の捷徑によりて我を觀ん哉。

二二　日本海の海戰

土井晚翠

五月　明治三十八年の五月なり。

提督　聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎。

この日五月の二十七、
遙に沖の遠きより
妙華の春のおとづれは、
歡呼とゞろく波のうへ、
無線の電に駈けり來つ。
提督起ちて一令を
傳へて拔ける千鈞の
錨のしづく三十里。
空は晴るれど海あらき
怒濤を蹴立てまつしぐら、
運命いづれ、生か死か、

選いづれを厭はんや。
光榮ふたつの途共に。

嗚呼、日本海、夏の波
山とたちくる對馬沖、
上の無象の海にわく
時劫の潮また捲きて、
東西こゝにふたつの史、
一つにまじる大波瀾。
時やまさしく橿原、
邦のもとゐのたちてより、

春秋互に移りくる
二千五百六十五、
おほいなるもの高きもの
常に滿つれど、目に觸れず、
ひとり神祕の名によりて
暗にひらめく電光の
たゞ一線を世に洩らす
靈、いまこゝに三萬の
身となり、血となり、肉となり、
水師となりて、鋼鐵の
生けるが中にたつを見よ。

銀浪捲きて雪散りぬ。
汐は矢と射る東水道、
見よ、今煤煙虚空に曳ける
艨艟つゞく幾浬。
末は濛氣に包まれて
露軍まさしく沖のあなた、
「皇國の興廢この役に
懸る。」起て〳〵、あゝ壯士、
起ちて扶桑の精凝れる
威武を世界の目に示せ。

二三　大和民族の理想

德富蘇峯

國民も猶個人の如し。寸刻も理想なくして精進すること能はず。國民的向上を必要とせざれば已む。苟もその必要ありとせば、吾人は須らくその理想を尋繹せざるべからず。敢へて問ふ、我が大和民族の理想とは何ぞや。

忠君愛國は日本國民一般の宗教也。如何なる思想の系統に屬する者も、この一點に於て一致を見出す也。佛教徒も神道者も基督教徒も乃至は所謂無宗教者も、均しくこの點に於て綜合せらるゝ也。然もこの忠君愛國の精神を發揚するの抱負奈何。

横井小楠
名は時存。熊本の人、明治維新の初、參與となる。

横井小楠は、富國に止らず、强兵に止らず、大義を四海に布かんのみといへり。これ、まことに世界を狹しとする抱負にして、彼の志趣の大にして、六合の中に飛躍したるを見るに足る。然れどもなほ語りて詳ならず、觀て精しからざる憾なしとせず。所謂大義を四海に布くとは何ぞや。吾人は彼を九原に作して、これを細論する能はざるを惜しむ。

東西文明を融和して、黃白人種的境域を一掃すべしとは、吾人がこの頃屢耳にする所也。されど我が國民擧りて此の如き理想を有するを得べき乎。學者には意義明白なる題目なるべけれども、國民的大題目としては、あまりに架空に、あまりに高遠に、小楠の所謂大義を四海に布くと同一ならんことを虞る。

若し吾人をして所見を陳ぜしめば、唯一あるのみ。曰く、白閥打破是也。而して唯是也。打破とは何ぞや。その閥を打破する也。白人を打破するにあらざる也。吾人は、白人彼自身が吾人の言論に驚愕してこの區別を混ずるなからんことを、豫め警告すると同時に、我が同胞も、亦精明にこの區別を看取せんことを要求せずんばあらず。吾人豈排外思想を鼓吹する者ならんや。蓋し東西文明の融和も、黃白人種境域の一掃も、彼我對等の交際より始めざるべからず。白閥打破は、その第一歩也。

協和も提携も對等の交際の後也。若し對等を待たずして協

和せん乎。協和にあらず、降服也。提携せん乎。提携にあらず、服從也。東西文明の融和も結構也。黄白人種的無差別も有難し。然も是唯兩者が對等の位地を占めて、而して後之を行ふを得るのみ。學者の議論としては如何に實際と緣遠くとも妨げず。されど國民的大題目としては、必ず直ちに實行し得るものならざるべからず。白閥繁昌の世の中に、四海兄弟の說教も聊か早計たらざるなき乎。我等の公平無私なる議論も、彼等の耳には弱者の泣言と聞え、徒らに公論に託して自己の利益を保持せんとする哀訴歎願と聞ゆるに過ぎず。此の如くして、何の日にか大義を四海に布くべきぞ。攻勢的防禦にあらざれば、防禦の目的を達すべからざる也。

我が國民にして白閥を打破するの一大決心一大覺悟あり、而して後聊か大和民族の爲に氣焰を吐くを得べきのみ。若し吾人の觀察にして大過なからしめば、かの世界兄弟の論はあまりに白閥の跋扈に辟易し、その保護色の下に隱れんと欲するものにあらざるなき乎。東西文明融和論も、到底競爭の難きを自覺して、體の善き遁辭を作りたるものにあらざるなき乎。果して然らばその言徒らに誇大にして、その氣頗る餒ゑたるものにあらずや。

惟ふに、藩閥打破は我が維新當初以來、民論の合言葉なりき。如何に其の有力なりしかは、今なほ之を藉りて、政界に横行せんとする者あるによりても知らるゝ也。此の如くして、我

が國民は政權を二三藩閥者流より奪ひて、之を天下に分配するを得たり。然も白閥の勢力は藩閥の比にあらず。大和民族の眞價を試煉する、只此の理想を如何なる程度まで達し得べきかにあり。吾人は白人を敵視せず、白人を憎惡せず。彼等若し我等を兄弟とせば、我等亦彼等を兄弟とせん。彼等若し我等を親愛せば、我等亦彼等を親愛せん。所謂白閥打破とは、彼等と平等界に協同生活を樂しむの徑路のみ。

中等教育國語讀本　卷九終

大正六年十月十七日印刷
大正六年十月二十日發行
大正七年一月七日訂正再版印刷
大正七年一月十日訂正再版發行

中等教育國語讀本
定價
卷一、二　各金參拾五錢
卷三、四　各金參拾貳錢
自卷五至卷十　各金參拾錢

大正七年度臨時定價
卷一、二　各金四拾錢
卷三、四　各金參拾七錢
自卷五至卷十　各金參拾五錢

著作權所有
本書原圖
嚴禁轉載
不許複製

著作者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　新村出
發行者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　西野虎吉
印刷者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　野村宗十郎
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　開成館
【振替貯金口座】東京第五參貳貳番
西部販賣所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎

（株式會社東京築地活版製造所印刷）

碧巖庵加南十郎作

[illegible]

[illegible]